3-3-5　新しい学問と化政文化

錦絵と忠臣蔵

＊鳥居家文書92「錦絵忠臣蔵」
　討ち入りの場面を描いています。

解　説

江戸時代中期に浮世絵の技術が進み，版木を何枚も使った「錦絵」とよばれる多色刷り版画が大流行しました。写真は歌舞伎や人形浄瑠璃で人気のあった近松門左衛門の「仮名手本忠臣蔵」に画題をとったもので，左下の「国長画」の国長は浮世絵師の歌川国長（1790～1829）と思われます。歌川国長は，役者絵や美人画で絶大な人気を博した初代歌川豊国の門人でした。

「仮名手本忠臣蔵」は1701（元禄14）年から翌年末にかけての，いわゆる元禄赤穂事件を題材としています。江戸時代には，時代物や同時代の武家社会の事件を上演する場合には，幕府を憚って，舞台となる時代や登場人物を他に仮託していました。「仮名手本忠臣蔵」でも，赤穂浪士たちに討たれる吉良上野介は「高師直」，討った大石内蔵助は「大星由良助」として描かれていますが，当時の人々は，当然それが誰にあたるかは理解して味わっていました。

＊「仮名手本忠臣蔵」は，当館所蔵の内田家文書（防府市），小田家文書（柳井市金屋），国司家文書，内藤家文書（下松市），原田家文書，持山家文書などにあり，防長でも広く読まれていたことがわかります。

山口県文書館所蔵アーカイブズガイド学校教育編
目次に戻る